＜自由研究＞

日本と中国における子どもの生活について
―子ども生活実態調査に関する資料に基づいて―

賈 燕妮 *

1．はじめに

本稿では、中国人留学生の視点から、子ども生活実態調査に関する資料に基づき、日中の子どもの生活に関する予備的考察を試みる。なお、入手した資料の制約によって、日中の調査データに関する調査時期、調査基準、調査項目、調査対象が統一されていない。そのため、日中の比較研究には及ばず、両国の子どもの生活の異同について紹介することに留まることをご了解いただきたい。

2．日本と異なる中国の子どもの教育事情

日本において、詰め込み教育の反省から、1980年代以降、「ゆとり教育」への転換が図られてきた。1992年、月一回の学校週五日制が実施され、2002年には、完全週五日制へと移行された。学習内容が大幅に削減されたため、近年、学力低下などが議論されている。

一方で、中国では1979年からの一人っ子政策により、中国の多くの子どもは一人っ子である。数々の指摘があるように、親たちはわが子どもがいい大学に入って、いい職に就くことを期待し、過度な受験勉強をさせる傾向にある。学校は、親の要求に応えて一面的に進学率を追求し、受験知識の学習のみを重視する傾向がみられる。

この問題に対して、中国政府は、丸暗記の知識偏重による受験教育を是正する改革を行った。その改革の一環として、「減負」（児童生徒の学習負担を軽減する）プロジェクトが実施された。

1995年に学校五日制が実施され、2001年に教育部が出した通知では、夏休み、冬休みおよび祝日を含めて、青少年には年間13週間の休日があると規定されている[1]。年間授業日数については、35週と定められている。すなわち、子どもの学校外の休み時間が保障されつつあると考えられる。2006年に改正した『中華人民共和国義務教育法』（1986年制定）では、新たに「学校は児童生徒の課外活動時間を保障し、文化娯楽などの課外活動を組織しなければならない。公共の文化体育施設は学校が課外活動を展開するために便宜を提供しなければならない」（第37条）と規定している。しかし、中国の学校では、入試に関係のない体育や音楽のほか、教科外活動を軽視する傾向がある。また、学校には部活動のような特別活動がないため、中国の学校外教育施設は日本の特別活動の要素を代替する役割を果たしている。子どもたちの余暇は増大しており、「校外教育」に学校での学習圧力を軽減する自由時間の活用が求められているといえる。

3．日本と中国の子どもの生活の諸相

日本の調査データについて、本稿では、Benesse教育研究開発センター『第２回子ども生活実態基本調査報告書』（2010年、以下、『第２回報告書』と略す）を参照する[2]。中国の調査データは、中国青少年研究センター編『中国未成年者データハンドブック』（2008年）を用

* 筑波大学大学院博士後期課程３年

表１．【日本】家での学習時間（学校段階別 %）

勉強時間		ほとんどしない	15分＋30分＋45分	60分＋90分	120分＋150分	180分＋180分以上	無回答・不明
平日	小学生	5.4	43.8	37.9	8.1	3.8	1.0
	中学生	20.5	30.1	33.3	11.3	3.3	1.5
休日	小学生	14.9	43.7	26.6	8.1	5.7	1.0
	中学生	22.2	24.8	27.0	14.6	9.9	1.5

出典：Benesse教育研究開発センター『第２回子ども生活実態基本調査報告書』第３章第１節により作成。

表２．【中国】2005年における学校外での小中学校の一日の勉強時間(%)

勉強時間	しない	１～30分	31～60分	61～120分	121分～180分	180分以上
平日	2.7	21.4	17.1	29.9	16.1	12.9
休日	4.7	10.4	14.6	26.1	17.8	26.4

出典：中国少年先鋒隊工作委員会弁公室・中国青少年研究センターによって、2005年に実施された「現代中国児童少年発展情況」に関する調査データ。中国青少年研究センター編『中国未成年者データハンドブック』（科学出版社2008年、pp. 134～135）により作成。

いる[3]。以下、子どもの睡眠状況、勉強時間、放課後の生活といった項目から子どもの生活の諸相を明らかにする。

３－１．睡眠状況

睡眠は、基本的生活習慣として、子どもの生活のリズムを表す重要な指標といえよう。

日本において、『第２回報告書』によると、６時ごろ及び６時30分ごろに起きる小学生は最も多く、回答割合が60.6%に対して、22時ごろまたは22時30分ごろ寝る小学生は最も多く、回答割合が42.3%である。小学生の平均起床時刻は6時28分、平均就寝時刻は22時13分、平均睡眠時間は8時間15分である。中学校段階について、7時ごろ及び7時30分ごろに起きるのは最も多く、47.1%を占める。また、小学生と同じで、22時ごろまたは22時30分ごろ寝る人が最も多く、回答割合は39.4%である。中学生の平均起床時刻は6時42分、平均就寝時刻は23時26分、平均睡眠時間は7時間16分である。

一方、中国において、国家統計局「小中学生の学習・生活状況に関する調査」（2005年）によって[4]、小学生の平均起床時刻は6時37分、平均就寝時刻は21時19分、平均睡眠時間は9時間18分である。中学生の平均起床時刻は6時07分、平均就寝時刻は22時45分、平均睡眠時間は7時間22分である。

中学生になると、平均睡眠時間が大幅に減っているのは、日本と中国の共通点といえる。しかし、具体的な傾向を見ると、日本と中国の違うところが見られる。日本において、中学生の平均起床時間も就寝時間も小学生より遅い時間帯へ移行した。一方で、中国において、中学生の平均起床時間は小学生より早い時間帯へ移行したに対して、就寝時間は小学生より遅い時間帯へ移行した。中国では、中学生になると、学習負担がかなり増えることが推察される。

３－２．勉強時間

日本においては、表１に示したように、家での勉強を「ほとんどしない」という項目の比率をみると、平日に小学生が5.4%であるのに対し、

表３．【日本】ふだんすること（学校段階別　％）

	体を使って遊ぶ（スポーツなど）	家の手伝いをする	マンガや雑誌を読む	テレビのニュース番組を見る	本（マンガや雑誌以外を読む）	新聞の記事を読む	日記をつける	ボランティア活動をする
小学生	73.8	73.5	73.4	71.7	61.1	33.0	21.5	11.3
中学生	61.9	58.7	83.1	74.5	56.3	31.2	17.5	11.2

出典：Benesse教育研究開発センター『第２回子ども生活実態基本調査報告書』第２章第１節により作成。
注）「よくある」＋「ときどきある」の％

表４．【中国】2005年都市と農村における小中学生の休日生活（分）

	宿題	テレビ・映画を観る	友達と一緒に遊ぶ	読書	けいこごと	スポーツ活動	家事の手伝い	ショッピング	雑談	音楽を聴く	ネットサーフィン	観光	社会実践
都市	145.8	104.8	92.0	75.3	73.7	67.2	61.3	58.9	53.9	47.6	37.9	35.6	27.2
農村	138.0	106.0	108.6	63.3	35.2	57.9	85.6	51.7	55.4	48.5	21.5	35.3	29.8

出典：中国少年先鋒隊工作委員会弁公室・中国青少年研究センターによって、2005年に実施された「現代中国児童少年発展情況」に関する調査データ。中国青少年研究センター編『中国未成年者データハンドブック』（科学出版社2008年、p.127）により作成。

中学生は20.5％である。休日について、小学生が14.9％であるのに対し、中学生は22.2％である。学校段階が上がるにつれて比率が増加していることが分かる。また、「180分＋180分以上」の層も同じ増加する傾向が見られる。家での勉強時間の二極化が看取できる。一方、小中学生とも「15分＋30分＋45分」と「60分＋90分」の層の比率が高いことは確認できる。

中国の調査データ（表２参照）では、学校段階別を明示していないため、上述のように小中学生の比較ができない。全体的傾向としては、家での勉強を「しない」小中学生の比率は平日にわずか2.7％、休日に4.7％で、日本より少ない。平日に中国の小中学生における「61～120分」の層の比率は一番高い。一方、休日に一番高い比率は「180分以上」の層である。「61～120分」の層は２番目になる。「減負」プロジェクトの実施にもかかわらず、学校からの宿題が減っておらず、依然として、進学へのプレッシャーが強いことが推察される。

３－３．放課後の生活

①　日本について

日本において、表３に示したように、「マンガや雑誌を読む」「テレビのニュース番組を見る」は小中学生ともに70％～80％。また、学校段階が上がるにつれて上昇している。逆に、「体を使って遊ぶ（スポーツなど）」と「家の手伝いをする」、「本（マンガや雑誌以外を読む）」といった項目は学校段階が上がるにつれて大幅に減少していく。「ボランティア活動をする」は1割位しかないが、中国の同類の調査で見られなかった項目として、注目したい。

②　中国について

中国において、都市と農村の共通点として休日は自宅で宿題を行うことが一番多いようである（表４参照）。テレビ視聴、映画の鑑賞といった娯楽活動や友達との遊びは子どもの休日生活の中で大きな位置を示している。また、都市部についてけいこごとへの参加が多く見られる。

表５．【中国】小中学生の学習塾とけいこごとへの参加理由について（％）

	能力が鍛えられる	学習内容が好き	仲間づくりができる	入学試験でプラスになる	親の要求に応じる	時間つぶし	周りは皆参加する
小学生	75.2	70.0	43.9	21.7	15.0	6.7	3.5
中学生	76.4	54.7	34.7	11.9	24.5	11.9	8.0

出典：中国青少年研究センター「中国青少年の学習と生活の現状及び期待」に関する調査、2005年、
中国青少年研究センター編『中国未成年者データハンドブック』（科学出版社2008年、p.136）により作成。

前述したように、中国の学校で部活動のような特別活動が行われていないため、音楽や美術、文化活動に興味を持っている子どもたちは学校外教育施設でけいこごとに通うことが考えられる。しかし、都市部と農村部の差が明らかである。都市部の子どもは、休日に平均73.7分をけいこごとに費やしている。一方で、農村の子どものけいこごとへの平均時間はわずか35.2分で、都市の子どもの参加時間の半分以下である。さらに「小・中学生の学習塾とけいこごとへの参加理由」に関する調査（2005年、表５参照）のデータからは、学習内容への興味や仲間づくりという本人の主体性による動機が高いのが小学生段階の特徴だといえる。また小中学生とも「能力が鍛えられる」という理由が最多であり、実利的な（目に見える）成果への志向が強いのは中国における特徴といえるのかもしれない。

４．おわりに

子どもの成長は学校生活のみならず、学校外の生活とも密接に関わっている。「学校外教育についても問題提起は、学校論の再検討を促すものであり、子どもの発達を支える地域に根づき、地域を変える力を育てる学校のあり方が問われることになる」[5]。本稿は、子どもの生活実態に関する調査データに基づき、日本と中国の子どもの生活の特徴、特に、子どもの学校外生活について整理した。その背景にある両国の青少年施策の分析及び地域環境の変化については、今後の検討課題としたい。また、現地調査を通して、実際の子どもの生活状態を明らかにすることが必要である。

注

[1] 中国教育部「義務教育課程の設置に関する実験方案」。

[2] Benesse教育研究開発センター『第２回子ども生活実態基本調査報告書』電子版、2010年。http://benesse.jp/berd/center/open/report/kodomoseikatu_data/2009/（2012年3月25日最終閲覧）。【調査方法】質問紙調査。【調査時期】2009年８月～10月。【調査対象】小学4年生～高校2年生。合計13,797名。【サンプルの抽出方法】市区町村の人口密度および人口規模を踏まえた有意抽出法。

[3] 中国青少年研究センター編『中国未成年者データハンドブック』科学出版社、2008年。

[4] 同上、p.127。

[5] 藤本浩之輔・他「地域における子どもの生活と学校外教育の課題」、日本社会教育学会編『地域の子どもと学校外教育』東洋館出版社、1978年、p.106。